



ヒザマクラ

【 Hiza-Makura 】

This is a Ayaka-Kurusugawa@ToHeart fanbook
Presented by TANA@Garyuh-Chitai in 2004 Autumn
for Adult Only

ヒザマクラ

～或る馬鹿馬鹿しい午後の物語～

目次

ヒザマクラ p04

ゲストイラスト ... p36
(大平大様・久富慎太郎様)

あとがき・奥付 ... p38

綾香発情

うわー、やつちやつた…。

浩之ったら、ちょっと実力がついてきたからって、悪ノリしすぎたよ。

勢い余って、あそこ膝が入っちゃったじゃない。

「だ、大丈夫？ ねえ、ちょっと、浩之？」

「うぐ…」

うわ、完全に白目むいてる。ちょっとヤバイかも。

ああ、他の場所だったり、どう手当てすればいいか分かるんだけど、男の人の口コロって、どうすればいいのかな。

やっぱりアイシング…って冰なんてないし、冷却スプレーなんか、かけても大丈夫なのかな？

「や、やっぱり…水で、冷やすべきかな…」

人気のない境内の社に、浩之を連れ込む。幸か不幸か、じつは時に限って葵はない。浩之は目を覚ます様子はなかった。

「ぬ、脱がすよ?」

無言の了解を得ると、彼のズボンと下着を、一気に引きおろした。

「うわ…」

水道で濡らしたタオルを押し当てるとい、浩之のあそこ…ペースが

ピクン、と跳ねて、下の袋がキュウって収縮した。

「すい…」これが、おちんちん…「んなに動くんだ…」

対戦相手に金的してしまったことは、何度があるけど、「ううしてマッサージしたことなんて一度もない。タオル越しに、伝わってくる袋の柔らかさ。そして、だんだん大きくなっている肉棒の逞しさ…。

「やだ…す」…

汗のにおいをかき消すくらいの、性器の体臭が、ツンと香ってく。きっと、これが精液のにおいなんだ…。

「あ…」

お腹の奥のほうが、シンシンと切なくなる。この感覚は、いつもオナニーしているときに感じる心地よい切なさ…。

「おちんちんの…におい…あ…んっ…」

手は、精子を作る袋をもみ続ける。もう治療でも手当てでもない。あからさまに、私の手は彼の精液袋を愛撫し、肉棒の勃起を、促していた。

「はあ、はああ…おちんちん、気持ちいいのかな…すく、ほ、勃起してる…ああ、また、においが、強くなってきたよ…ああ…」

目を伏せ、鼻を近づける。そして、腫れあがった肉棒に、熱い吐息を吐きかけて、そのまま、胸いっぱいに男の精臭を吸い込む。

「んあ…ああ…あ、やだ…お、おまん…濡れちゃった…」

ソクソクと背中が震え、一瞬、股間が痺れたかと思うと、ドロップと愛液が下着に染み出してきた。

すこい、手も触れていないのに、こんなにグチョグチョになるなんて、今までなかつた。

「はあ、はあ…ねえ、もっと、もっと…大きくして…おちんちんの二オイ…欲しい…」

本能的に唾液が溢れてくる。それが意味するところは分かっている。

私は、これが舐めたい——思い切り、しゃぶりたいんだ。

うわ…、これが
おちんちんのニオイ
なんだ…

ああん…すごい：
な、なんだか頭が
ボーッとして…

やだ、口の中…
ああ… よ、ヨダレが
あふれてきちゃう…

チンポ…浩之のチンポ…
ああ…しやぶりたい：
このキンタマのくさい精液
全部、飲みたいよお…



精袋愛撫

「綾香…」

誘惑に負けて、唇を赤黒いペースに近づけたとき、不意に浩之の声が聞こえた。

「あ、ひ、浩之…」「これは…」

彼の表情には、痛みはもちろんのこと、驚きすらなかった。

私が陰嚢を愛撫している間に、目を覚ましていたんだ。そして、私が精液の一オイに欲情しているのも、全部見ていたんだ…。「あ、あの…これは、その…あつ…」

くだらない言い訳は不要だった。

浩之は優しく私の頭を撫でると、空虚な嘘を吐こうとしていた唇を股間へと導いてくれた。

「ああ…んつ、んう…んちゅ、ん…んつ、はあ、ああ…」

たちまち、彼の体臭が口と鼻から入り込んでくる。

「ああ…くさり…くさいの…んつ、んはあ…んちゅ、んふう…」

臭い——それは、奇妙な賛辞だった。

その証拠に、私の口は、たちまち彼の股間を唾液まみれにしていく。「おいひいい…ああ、浩之、お、おいひいよお…」

「チンポの一オイ、好きなんだ」

「ち、チンポ…、好き、精液の一オイ、好きなの…好き、飲みたい…」

「いつも男のチンポ、こんなふうにしゃぶつてるのか？ 寺女の来栖川

お嬢様が、こんなチンポ好きとは驚いたね」

「そ、そんなことないわ！ 私、見るのも初めて…なんだから…浩之のだけ…あなたのだから…」

そうだ——そこまで言って、自分で気がついた。

浩之のだから。彼の一オイだから。私は、こんなにも発情しているに違いない。だって、私は浩之のことが…

「ううん…そうよ、チンポ好きなの…だから…舐めさせて…」

言えない。こんなことをした後に、小奇麗な告白なんか出来ない。

「ちんぽ…チンポが好き。タマを舌でしゃぶるのも、ああ、大好きな…。ねえ、精液…チンポ汁かけて…飲ませて…、私、おマンコがグチョグチョになつて…このままイッちゃいそうなの」半分は本心を隠す言葉。

だけどもう半分は、牝としての切なる言葉だった。

私の性器は、ますます痺れて、まるで自分のものではないような、甘い昂ぶりに打ち震えている。

「じょうがねえなあ。はは、いいよ。キンタマの裏のほうまで、しつかりと舐めろよ。そこが一番感じるから」

「うん、キンタマ…あは、美味しい…あむ、んむ…ふは、んふ…あぐ、んむうう…ふはああ…あは、じぶんして、可愛い…」

「く…うつ」

浩之は本当に感じてくれている。ペースの先端から、ぶぴゅ、ぶぴゅ、って少しずつ白濁液が漏れ始めた。

「ああ…チンポザーメン、出てきたあ…あは、素敵…。かけて、髪睾丸を、軽く噛んで舌で転がす。そして肉棒の裏筋を、舌で撫でて、唇で亀頭を、そしてまたキンタマをついぱむ。

浩之は、そこでとうとう、腰をがくがくと奮わせた。

ああん…おいひい…
キンタマあ…精液袋お…
汗とチンポ汁くさくて
おいひいのお…

臭くて大きい
チンポ大好き…
精液大好き…
あはあ…

うわーうわー

ぬちゅ…

かけて、かけてえ…つ
身体中、浩之のチンポの
ニオイが取れなくなつちやう
くらい、ドロドロにしてえ



放尿絶頂

「くああああっ！ で、出る…」

「あ、あはああっ！ 热い…きやあうう…」

突然、射精された大量の精液。

そのあまりの勢いと熱さに、つい唇を離してしまっていた。

「あ、ああ…す…」、精液、精液が…あんなに、あんなに…あん…

熱くて、臭くて…す…」、素敵…」

へたり込んだ私に、浴びせかけられる精液。「これがすべて、私の睾丸

愛撫とフェラチオによつて生み出されたものだと思うと、胸の昂ぶり

は、ますます大きく、早くなつた。

「私の、私の精液…かけて、全部、私に、あああっ！ あ、な、何…

きやうああっ！ う、うそ、こ、こんな、あ、あああっ！」

ぶしゃああああ…、じょぼぼぼぼぼ…

「あ、あああっ！ い、イク…、こ、こんなの…あ、ああっ！ は、

はじめて…つ、い、イク、あああっ！ お、おしつこ…おしつこが漏れちゃ…あああっ！ も、漏らしながら…あ、ひき…あああっ！

い、イク、イクううううーーーーー！」

ピクピクピクッ！ ジョバババ、ピクンッ、ピクピクッ！

精液の一オイに刺激された私は、完全に身体の自由を失っていた。

はしたなく失禁しながら、絶頂を迎えていた。

「やあああ…おしつこ…見られちやつた…浩之に、おしつこ…ああ…「ショーンベンだけじゃないだろう？ ほら、マンツオモ…」

「あ、ら、らめえ…さ、触つたら、い、今、まだ…あ、ああっ！」

「また、イクか？ それとも、まだショーンベン漏らしたくなる？」

「りよ、りょうほ…う、ひいいつ！ あ、い、意地悪…し、しな…あああっ！ ひぐ、イグ…あああっ！」

何度も何度も、怖いくらい大きな快感の波が押し寄せる。

外からではない。私の中から、どんどん湧き出てくる淫猥な衝動。

——まだ。まだしたい。もっと気持ちよくなりたい。

「綾香、そのままオナーネして。俺も綾香の一オイで、センズリ

するから。綾香を俺のチンポの一オイで染めてやるから」

「う、うん、する…おなーするつ！ 浩之のセンズリ…見せて、

もっと近くで、チンポザーメン出るところ、見せてえ…つ」

浩之のオナーネは、とても激しくて、なんだか痛そうでした。

「ああ、綾香…綾香、いいよ…好きだ…、綾香っ！」

「浩之…浩之、わ、私も、私もおつ！ す、好き…大好きいっ！」

私は、浩之の告白につられて、胸に封じていた秘めていた想いを、

排泄物と共に、あっさりぶちまけていた。

無垢な想いは、嬌声に溶け、見る見る淫靡な色に染まっていく。

「好き、好きいっ！ チンポ、おマンコおつ！ 精液好きなのおつ！ ねえ、見て！ オナーネ見て！ 浩之のこと好きだから…だから、おマンコ、狂っちゃう！ チンポとショーンベンの一オイで…い、イクうつ！ イッちやうのおつ！ あ、あああああーーーーー！」

意識が弾け飛ぶ寸前、二人が垂れ流した、濃密な排泄物の香りが混じり合い、私を真っ白に満たしていった。



肛門接吻

陰毛の一本一本まで、浩之の身体は私のもの……。

あの日をきっかけに、私は、毎日、浩之のところに通いつめた。

浩之も、相変わらずの優しさで、私にフェラチオをさせてくれる。

そして、私がイクまで、何度も射精して、身体中をザーメンまみれにしてくれる。

「綾香にしゃぶられると、自分でも驚くくらいに精液が出るんだよな。蹴られたショックで、キンタマ壊れちまたのかもな」

浩之は、苦笑するけど、私はそれが嬉しかった。だって私も、彼の精液を飲み始めてから、身体が急に変化してきたのだから。

おマンコからは愛液が止まらない。学校では最低5回以上は下着を替えなければ、愛液が失禁したかのように滴り落ちるほど。そして、胸も一気に大きくなつた。乳首が勃起したまま元に戻らなくて、痛い。浩之に優しく、激しく、いやらしく揉んでもらいたくて、切なくなる。

だから、浩之に会つだけで、身も心も暴走してしまう。

「ふふ、浩之のお尻の穴、美味しい…気持ちいいでしょ？ 男の人は、肛門をほじりると、勃起しちゃうんだよね？」

「うわ、は、恥ずかしいぞ、この格好は…」

「ダメ、動かないで。ふふ、ほおら、キンタマが震えて…うふ、濃い精液いっぱい作つてくれてる。ねえ、もっと、もっと頑張つて臭くて

甘いチンポ汁作つてよ。ほら、んつ、んふ、んふ、くちゅ…ちゅるつ、ケツ穴、奥まで舐めるからあ…んつ、んうん…」

「浩之の味、ウンコの穴…ああ、素敵、肛門の毛まで、美味しい…」

舌をねじ込み、彼の排泄穴の内側を、丹念に舐める。しわの一つ一つ、

「ふちゅ、ふちゅうつ…ちゅるちゅるちゅるちゅる…」

「んく、んく、んうううんつ…ふは、はあ、はあ、あはつ、ひつ？」

お尻の穴にヨダレ垂らされて、一気に吸われると、ウンコ吸い取られるみたいで、すこく気持ちいいでしょ？」

「や、ヤバイくらい…気持ちいい。で、でも、綾香、その…」

「いいのよ。出したくなつたら気にしないで。おしつこも、ウンコも、精液だつて、全部あなたから排泄されたものなんだもの」

そう。だから肛門へのキスだつて、唇へのキスと変わりはしない愛の交接。いや、むしろより深くて濃い、本気の愛情表現だとと思う。「キンタマ…キンタマセーえきが、あは、もうパンパンになつてるよ。うふ、もうちょっとで、今日5回目の射精かなあ？」

「ぐ、あ…マジで、出そう…」

「じゃあ、たっぷり肛門吸つてあけるから、たっぷりたっぷり、射精してね…んふ、好きよ、浩之の、ケツ穴…うふ…んつ、んむうつ」

「じゅぱぱぱぱぱっ！ カユルカユルカユル…ふちゅ、ふちゅちゅつぶちゅ、ブリッ、ヒフフフッ、ふちゅうつ…」

「うぐ…ああああああ…綾香…で、出る…」

キンタマの精液が一気に射精され、肛門が舌をギュッと締め付ける。同時に彼の香りが胸の奥まで流れ込んで、私を燃え上がらせた。

「あ、ああつ…ひ、浩之…あはつ、素敵、イク…わ、私も、ケツ穴の一オイでイク…んああつ！ イッちゃうよおおつ！」



淫乱奉仕

浩之の陰嚢は、本当に壊れてしまったのかもしない。

あの日以来、何度も射精しても、その量と濃さが変わらない。いや、むしろ濃厚になつてゐる氣すらする。

「あん…浩之のスケベ…こんなに濃いのぶっかけられたら、私もどんどんスケベになつちゃうじゃない…」

「綾香は、もとからスケベなチンポ狂いだ！」

「バカ、あなたのせいよ。あなたが私をこんなにしたんじゃない…もう、分かってるくせに…」

萎えるどころか、ますます固く勃起する肉棒を、おっぱいで愛撫しながら、私は浩之を睨んだ。浩之は苦笑しながら、すまん、と目を細め、緩やかに腰を動かしてくれる。

「あ、んつ、も、もう…おっぱいが、こ、こんなに大きくなつたのも浩之のせいだつて…あ、ああ…わ、分かってるの？ うん…つ」

「分かってる。だから、こいつして謝つてるだろ」

「んぐ…、あむ、んちゅ、ふは、あ、はあ、はあ…も、もう…バカあ」突き出された亀頭が、唇に押し付けられると、反抗の言葉なんて、あつという間に消えてしまう。

百センチを超えた私の乳房は、全体が性感帯になつていて、彼のストロークに絶え間なく快感を増幅させ、私から力を奪つてしまふ。

ぬぢゅ、ぬぢゅ、ぢゅるつ、ぶぢゅ、ぐつぢょ、ぐぢゅ、ぐぢゅ、ぐぢゅ、ぐぢゅ…！」

おっぱいの谷間に、浩之が射精したチンポ汁が塗りこまれていく。ローションのように、それは私の肌を輝かせ、昂ぶらせ、毛穴から

身体の中に染み込んでくる。

「おっぱい…ああ、おマンコみたい…チンポで犯されて、キンタマが押し付けられて、ああん…つ、感じるの、気持ちいいの…犯して、もっと、おっぱい犯して、精液を、もっと濃いの射精してえ…つ！」

「ぶぢゅ、ぶぢゅぶぢゅ、ぶびゅうう…、じひゅ、ぬぢゅ、ぶびゅぬぢゅるつ、ぐぢゅ、ぐぢゅ、ぐぢゅつ…」

「あ、あはつ、射精しながら、う、動いて…ぬうつ！ いいよおつ！ こ、これ、これ…いいつ！ おっぱいマンコ、好き、好き…いいつ！ わ、私、スケベに…またチンポ狂いになつちゃうよおつ！」

もう、我慢できない。

これだけ愛する男の、排泄物の香りと味、そして感触に、感覚という感覚を全て犯された状態で、女の本能を抑えることは出来ない。

「ひ、浩之…ねえ、お願い。セックスして…。おマンコしようよ…、わ、私、フェラチオとかおっぱいマンコだけじゃ、もう、もう…」初めてのセックス——数日前なり、どんな口マンチックな雰囲気を想像できただろう。

しかし、今は、目の前のチンポが欲しい、子宮の隅々まで、ドロドロの白濁液で満たして、マンコ中に塗りたくりながら、スケベな膣穴をえぐりまわして欲しい——それだけしか思い浮かばない。

「いいよ、綾香。だけど…そうだな。普通の処女喪失って、綾香には、ちょっと似合わないな。だから今日はまだダメ。そのかわり、その日には、最高の快感を用意してやるよ」



あはつ
せーえき出たあ

おっぱいマンコ犯して…
もつと…もつとお！

74ユウ
74ユウ 74ユウ

私のおっぱい、浩之専用の
ザーメン便器だよ。

精液浣腸

「ああああー、は、入って…くねー、おおおおー、かは、ああー、
んおおおおー、か、浣腸…し、染み込んで…くねー、くねー」

「一週間の禁欲」という、突然突きつけられた地獄の日々が終わり、ようやく浩之の下に行つた時、今度は狂気の悦楽地獄が待つていた。

今日は、処女喪失を約束した日。

普通のセックアジャタメ、といふ言葉以外何も知らないでいいなが、私は、期待と不安で、毎日、オナニーすら没頭できなくて、本気で狂いそうになっていた。

アハハッ、ちゅうちょ、アリイイッ！

「一週間、綾香の」と思つて溜め込んだ精液と、俺の小便をフレンチした、特別な浣腸だ。これを入れたまま、セックスしてやるよ」「んあああああっ！　お、おなか、破れ：あはああっ！　せ、精液っ、おしつこむ…ああ！　染み込んで、くるううううううっ！　あ、ああっ

「な、なつてゐるのー。う、イク…おマシーナ、する前なのに…が、浣腸で…ウンコ、チンボ汁でドロドロになつて…ああっ！　あ、あひ、きひいいっ！　イク、いぐうううううー。」

「い、痛い……でも、きゃひい！　き、きもじいひいっ！　あは、
も、もっと、こーもん、ケツ穴にチンポ汁入れて……お、お腹いっぱい、
飲ませてええっ！　あひやあっ！　い、イク……また、イクううっ！」

「さあ、綾香。これで準備できたな。マンゴも、これだけドロドロになってるから、あんまり痛くないと思うけど…」

「も、わっ…」こんな時まで優しくしないでよお。お願ひ、痛がつてもやめないで。ううん、痛いくらい、苦しくて泣いちゃうくらい激しくして…このいやらしき精液便所をレイブしてもいいから…」「…」

私のらしからぬ懇願に、浩之はやっぱり優しく頷いた。

「ああ、分かった。綾香みたいな強い女を泣かせるのって最高だしな」
浩之の手が、ぎゅっと尻肉を掴む。

「あ、きやはああっ！ やだ…お、おなら…出ちゃったあ…」
興奮のあまり、緩んだ括約筋の間から、大便汁が汚らしい放屁音と一緒に漏れ出してきた。

「はは、便所女らしく、小便精液とウンコ汁まで漏れ出してるぞ」
浩之は、それを手で拭い取ると、マンコ汁と混ぜ合わせ、私の目の前に見せ付ける。

「セックスしたら、Jのエロトロしたので、綾香の身体が満たされる
んだ。そして、これが赤ちゃんになるんだな」

浩之の手にある、精液と愛液、そしてウンコとおじりの混ざった汚液を舐めると、ますます身体が燃え上がる。

ああ、そうだ——私はセックスするんだ。初めてのセックスで妊娠する……そんな甘い期待が、自然と私の腰をくねらせる。

あ、あはあんつ！
ぢゅるぢゅるつて、チンボせーえき
は、はひ…はいつてきたああつ！

お尻いいよおつ！
か、流腸いいよおつ！

もつと
もつとおつ！

もにもにゅ

ケツ穴のウンコ、全部ザーメンで
ドロドロに溶かしてえええつ！

ああつ！ オ、お腹が…ぐりゅぐりゅ
して…き、気気持ちいいのおおつ！

ガクガク

ピョウ

ぶくぶく

ぶくぶく

ぶくぶく

リリ

ブルブル

ガクガク

キュウ

ブ



处女喪失

「ぐ…あ、あが…あああああ―――つ…」

ペースが、腔口に当たられると、迷う隙を与えることなく、
脳裏がうつらうつら、あまり二度つかなく、少女模を製へる。

「んあ、痛：ああああっ！ あ、あんっ、かはあっ！」

痛かった。でも浩之は、私の願い通り、激しく私を犯してくれる。

彼の気持ちが、その焦燥にも似た腰使いから、文字通り「痛いほど」

「か」吉川 久 稲葉 未 善

「綾香…？ やっぱり痛すぎるか？」

「はあ、はあ…ち、違うの…私は、痛くてもいいの。でも、あなたが、気持ちよくないと…私も、辛いわ…。だから、もっと、自分のことを考えて…。私は、それが一番嬉しいのよ…」

「…そつか、ごめんな」

浩之は、腰を再び動かし始める。さっきとは違う、性欲の赴くままに私という肉便器を味わう腰つき。

「あ、あは…ううん…いいよ、浩之…、痛いけど、素敵…。痛いのが…」

彼の快感は、私の苦痛と一体なのだ。だから、私は、彼の獣のような息遣いが愛しくてたまらない。

「綾香、チンポ、すげえ気持ちいいよ」

もつと、もっと私を苦しませて欲しい」とあり、懸念している。

「ああ、嬉しい…浩之、いいよ。あ、ああん…わ、私の身体、もつと
好きにして…壊してもいいの…あ、くは、あはああんっ」

「ああ、もう遠慮なんかしない。だから、この妊娠みたいなお腹を…」

卷之二十一

「わやわあああっ！　あ、あおおっ！　お、お腹あ！　あ、ぐあ、で、出ぬうううー。あおおっ！」

浩之は、私の壁をペースで突きながら、浣腸で膨らんだ私のお腹を、思ひ切り手で叩いた。

たちまち中の汚物は圧迫され、奇怪な悲鳴を上げる。

ブリブリイイイツ！ ピツ、ピシャアアアアアアツ！

「あ、ひきこいつー。ち、漏れてる、漏れてるううつー。わ、私、
私、おマンコしながら、あ、あひいいつー。ウンコ漏らして…あ、

あはあ!! キー キー キー!! ああ あああああ!!

失つて…苦しくて、痛くて、恥ずかしいと、気持ちでござります。

あ、あはあああんっ！ ウンコ、もっと、もっとお腹、ギュッってしてえっ！ チンポで、お、お腹の中からグチョグチョしてえっ！」

グチヨツ、グチュツ、びぶつ、ブリブリツ、ぐちゅ、グチヨツ、
ドーフ、ボウフ、ドボウフ、ボリュボリュ

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପରିଚୟ

「ああああっ！ これが、これがあああ…せ、せつくす、せつくす

なの、セックス好きいいつ！こ、こんなの、あはきやはあ？！

私の身体は、さらに壊れ——覚醒していく。

ん…あああっ！
い、痛い…つ！

お腹の中…ウンコ精液が…
ち、チンポに押されて…るうつ！
おマンコ、痛いのに…ああんつ！

い、いい…
いいよおつ！

きやひいいつ！ おマンコ…
おマンコいいのおおつ！
痛いのが…苦しいのが…
い、いいのおおつ！ ／＼

ドリーム

ヅクッ!
ヅビッ!





淫亂排泄

此之謂也

で、出る…つ！

み、見て：浩之つ

う、ウンコ、
ウンコぶりぶりひり出しながら
イク…イクの…っ！
見て、もつと近くで…ああっ！

見て、もつと近くで…ああつ！
ウンコと母乳出しちやううつ！
ぜ、全部ここでぶちまけるからつ
イクところ…見てえええーーつ！

イクうう：つ！
い：いいいよおつ
オナニーの：な、な、
何倍も気持ちいいいつ！
こ、こんなの、は、
はぢめてらよおおつ！



淫女夜想

「あ・な・た……だなんて、もう私、何言つちやつてるのよ……」
自室のシャワーを浴びながら、私は夕方の痴態を思い出していた。
あまりの恥ずかしさに赤面しながらも、鏡に映るその顔は、だらし
なく一やけている。

「でも、愛してる……なんて言われちゃつた♪ ふふ、おマンコにも
いっぱい射精してもらつたし……ああ、浩之って最高だわ……」
脱糞しながら絶頂を迎えたあとも、私たちは汚物の中で絡み合ひ、
何度も何度もセックスに酔いしれた。

腰は、すっかり彼のペニスの形に馴染んでしまったし、愛液だけじゃ
なく、母乳も垂れ流し状態になつた。今でもシャワーの水流に当たられただけで、トロトロと甘いミルクがあふれ出している。

「でも浩之も、初めてだったなんて……なんだか嬉しいなあ」

全部終わつてから、彼が童貞だったことを聞いて、私は絶句した。
彼のセックスが初めてとは思えないものだったから、というのもある
が、何より、こんな素敵な男を、あの学校の女達が、ほつたらかしに
しているという事実に対して、心底呆れてしまつたのだ。

「まあ、おかげで私が、こんな幸運に恵まれたわけだけじね」
シャワーを止め、洗面器を手に取る。中にはなみなみと、私と彼の
排泄物が満たされている。今日ぶちまけたものを、持つて帰つてきた
のだ。

「ふふ、すこしい香り……こんなこと、他の女には出来ないわよね……」

ぐちょ…、グチユ、グチュグチユ、じろお…

かき混せると、異臭がバスルームを満たしていく。

洗い清めた身体に、またみつちりと汚物の香りが密着し、染み込んで
いく。一人の想いが溶けたそれは、どんな香水よりも芳しい。

「あん…ぬるぬるしてる…あは、気持ちいい♪ 髪にも、肌にも、
顔にも…全部塗りたくつてみたかったの…ああ、あつたかあい…」

ドロッ、べちょおお…り、する、ぬりゅ、ぶぢゃ、ぶぢゃ、べちょ、
ドロドロドロお…り、べぢゃああ…

「はああ…ウンコまみれだよお…、いいの、また、また子宮が疼いて
きちゃうよお。浩之…ううん、あ、あなたあ…もっと、もっと、
犯して、汚してえ…チンポ汁、吐いちゃうまで飲ませて欲しいの…」
鏡に映る私の顔は、相変わらず、だらしなく笑つている。

排泄物まみれになつた顔、便器の顔。そして妻の顔。

浩之が与えてくれる快楽に、身も心も完全に染まつてしまつた変態
淫乱女。

「でも、でもお…気持ちいいんだから、これを愛してるんだから、
仕方ないよ…ほら、こんなに、美味しいんだもの…」

口の中に蕩けていく、甘い甘い糞便精液。母乳の味も混ざつて、より
いっそう、私を淫らにさせていく。

「あああん…おマンコ…おマンコにも、ウンコセーえき塗るの…、あ、
あはああ、お、おマンコ、き、き、きもひ…いいい…」

ああ、浩之。私、この快楽が怖い。この幸せが恐ろしい。
私達の淫靡な幸せは、どこまでエスカレートしていくの…?

んふ…チンポ汁と
ウンコ…ああん

いっぱいニオイが
ついちゃう…明日、学校で
みんな気づいてくれるかな？

もっと、たっぷり
塗らなきや…ね

ぐロオ…

おマンコの中まで
浩之と私のニオイをつけて
一日中過ごせるなんて…
ああ…また、ドキドキして
おマンコ汁があふれて
きちゃうよお…

禁断症状

「い、意地悪だよ…浩之、も、もう…早く、早く早く…っ！」

初体験から一週間、私は毎日、彼に会いに行つた。そしてキンタマの中に溜め込まれた一日分の精液を、たっぷり飲んで浴びて、膣内射精され、何度も絶頂を迎える日々が続いた。しかし…

「そつだな、今日で約束の一週間だし。じゃあ、おいで。お待ちかねの浣腸してやるから」

「早く…はやく…ずっと、ずっとウン！」我慢してたんだからあ…」

一週間、彼は浣腸だけでなく、脱糞そのものを私に禁じていた。毎日セックスしていくとも、だんだんそれは激しい苦しみになり、欲求不満になった。それだけ、初めの浣腸セックスが刺激的だったという」となのだろう。

精液の味を覚えた腸は、禁断症状で、いつも以上に熱く疼いている。

「もう、お腹が限界なの。学校でも、ずっとウンの…とばかり考へて、おっぱいとおマンコ濡らしてたの…ほらあ、見てえ」
境内の外であることなんか関係ない。私は下着をおろすと、ケツ穴を彼に差し出した。

「じゃあ、たっぷり入れてやるよ。ほら、いくぞ」

「すふっ、するするするする…ぐちゅ、すぶぶぶ…」

「え…？ あ、うああああ…！ そ、それ、あああ…まさか…」
「ち、チンポが…は、入ってる…！」

浣腸器で注入されると思い込んでいた私は、いきなり肛門を、生のチンポで貫かれ、激しく動転していた。

「え…？ もう出る…」はじめてのケツマンコは、そのまま生で浣腸してやるよ。

毎日、綾香に飲ませても、全然、勃起がおさまらないんだ。やつぱ壊れたのかもな。はは、でも、こういう時に便利だよ。ほら、生浣腸つてキクだろう？」

「きひ…き、キクううう…！ あ、あは、すいじのお…ねえ、聞こえりでしょ？ お腹の中、すこくウン袋が悦んでるうう…！」

「ゴロゴロゴロ、ぐりゅうう…ぐるり、じゅるり…」ゴロゴロッ、ぐるぐるぐるぐる…！」じゅっ、グボボッ！

「ああ、ザーメン、チンポ汁がいっぱい…のぼってくるの…ウンチに直接、熱くて臭いのをぶっかけられてる…あは…すこいよお…」「ほら、動くぞ。綾香も、もっとケツ締めて腰振って、チンポ汁搾り取ってくれよ。じゃないと抜いちまうぞ…」

「い、いやあああ…！ んつ、ああうう…！」これでいい？
ね、ねえ、チンポ、こ、これで気持ちいい？ ああ、が、頑張るから、もっと頑張るから…抜かないで…抜かないで下さい…！」

「ブヒイイッ…、ヒハフフッ…、ぶりゅ、ぶりゅぶりゅぶりゅう…！」

「綾香、ケツからザーメンウンが泡立つて、漏れてきてるわ。ほら、もう出したいんだわ…！」じじじ、ひり出したいんだわ…」

「だ、出したい、出したい…！」気持ちいいの、じつは…ブリブリ

「遠慮しないでいいよ。さあ、思い切り出しちまえ…！」

「あ、チンポ…抜ける、抜けちゃう…！」あああ…！ らめ、も、もう出る…」一週間分のウン、全部出しちゃう…！」



屋外脱糞

う、ウンコ…ああつ！
で、で、出るううつ！

んおおつ！

ふむ
ふむ

ガク
ガク

んあつ！

ピタッ



イク…イクイクうつ！
ひ、ひんぼ…うんこお…つ
もつと、もつとおおおおつ！
もつと見て、見て、見て、ウンコで
イクところ…見てええつ！

ああ…太いよ、大きいよお…
一週間分の…ウンコ
見て、こんなに出るのおつ！

見える？ ほら、
チンポ全体にケツ汁
ついてるでしょ？

ほら、こうやつて
ウンチ汁を丁寧に
舐めるの…



んふ…チンポのニオイ、
あなたも好きよね？
ふふ、キンタマの裏まで
ベトベトよ。さあ、
あなたも舐めましょ？

牝豚調教

「う、ううう、んぐああああああ！」

「私たちには、彼女に精液の味を教えてあげることにした。浩之のチンポを汚いだなんて、一度と言わないよう」。

「あかり、お前の処女、もううつてやるよ」

「ひ、浩之ちゃん…や、やめ…ぐきやああっ！　い、いきいい…」

「あは。私のウソコがべつとりついたチンポが、どんどんマンコに入つていくわ。ふふ、痛くて…気持ちよさそう…」

「お、おおおおおお！　ぎやああっ！　た、助け…助けてえっ！」

「ふふ、痛みはコレですぐになくなっちゃうわ。私もこの特製浣腸で、精液の虜になつたんだから。ほり、3本目入れてあげるね。これできっと、あなたも素直になれるわ」

「うう、おおおおお！　お、おなが…があ、ぐぶうええ…」

「彼女の肛門に注入しているのは、浩之の精液と、私がひり出したばかりの大便と母乳。そして一人のおしつこ。さらには、神岸あかりさん自身の、ゲロ汁も混ざっている。

「ボボボボボボボボボボボボボボ…　あぬあぬあぬ…」

「ほひ、美味しいでしょ？　彼を愛しているなら、気持ちよくなるはずよ。ほひ、ほひ、ほひ」

「お、お！」　おいかい…ですか？　おいひい、おいし…ぎやあっ！　ひむちらじですか？　もう、やめでええ…」

「あかり、まだイッてないのに」「やめるわけにいかないって」

「浩之ちゃん、もう、もう、ゆるじで、ゆるじでええ…！　うげっ、お、お…うぎゅええ…！　うげえええええ…！」

浣腸液がせり上がって、とうとう彼女は大量に嘔吐した。

獣の様に叫び、悶絶して、胃液混じりの精液をぶちまける。

「く…ケロ吐くと、急にしまりがきつくなるな…ぐうつ、あかり、もう出るや…、お前も綾香と一緒に、孕ませてやるからな！」

「あ、あがちやん…いや、いやああっ！　ながにださない…でえっ！」

「うげ、おげえええ…！　い、いきやああああ…！」

ブリイイツ！　ブビ、ブババババババッ！　ふりふりふりふりふり
ぶりいいつ！　ふぼっ、ブシャアアツ、ブンビビビイツ！

浩之の射精と共に、彼女は脱糞し、急に動かなくなつた。

「ふう、あかりのやつ、俺のことを、ここにまで拒絶するなんて思わなかつたな。いつも犬みたいに、俺になついてたのに」

「大丈夫よ、きっと。自分が覚めて、また教えてあげれば、絶対に分かってくれるわ。私も、このまま否定されたくないもの」

他の女ならまだいい。だけど、幼馴染の彼女が、浩之のことを分かつてあげられないなんて、そんなの悲しすぎる。そして、悔しそうする。そんなの、彼が可哀想じやない！

「大というよりフタね。いいわ。私がメスフタとして徹底的に教育してあげる。私達の愛し方を否定するなんて許せない」

「どう調教するか、一つ案がある」

浩之の提案は、私と彼女のアナルを連結して、ウソコ精液を互いに射精しあう、というものだった。もちろん、私たちの食事は浩之の精液だけ。吐くことも許さない。

「ふふ、素敵。これなら彼女もすぐにチンポ奴隸になれそうだわ…」



糞豚結合

3日後

ま、また出るうつ！
う、ウンコ出ちゃううつ！

ふごおおつ！
んほおつ！

グルグル
ぐるぐる

ふわう



レザーマクラ

「えっとね…その…」

私は、照れ隠しに彼の精液袋に顔を埋めて、彼の視線を避ける。

顔が、熱くなる。ああ、私ってこんな女だったっけ？

「あ、あのね……本当に赤ちゃん…できちやつた…みたい」

「本当か？ はは、やつたな、綾香」

「え、えへ…なんだか、照れくさいね、じうじうの…」

浩之は、ぐしゃぐしゃと私の頭を撫でて、本気で喜んでくれていた。その逞しい手が髪を愛撫するたびに、ほっぺたに感じる、精液袋の柔らかさが心地いい。ああ、なんて幸せなんだろう。

そう。あの口の中で、あんなバカみたいな事故がなかつたら。コレを私が蹴り上げたりしなかつたら…こんな幸せなんてなかつた。

「……ごめんね、浩之」

「な、なんだよ、突然。何謝ってるんだ？」

「今ね…思い出したの。私、あの日、あなたのチンポ蹴った後、謝つてなかつたでしょ？」

「気絶してたから、よく覚えてないけど…でも、あの時、もしあ前に膝枕でもしてもらつてたら、違つた惚れ方してたかもな」

「今、してあげようか？」

「いや、いいよ。チンポしゃぶられてるほうが、気持ちいいから」「もう…バカ…」

まあ、確かにそのほうが、今の私たちには似合つている。

浩之の股間に顔を埋めるようにして、深い深呼吸をすると、心地よい安堵感が身体を満たしてくれる。激しいセックスの後の、この安息が、

だから、浩之といふときは、私は彼の膝枕を独占する。

浩之の股間に顔を埋めるようにして、深い深呼吸をすると、心地よい安堵感が身体を満たしてくれる。激しいセックスの後の、この安息が、何物にも代え難いひとときになっていた。

「ねえ、浩之…もう一つ、いいことがあったの」

「へえ、なに？」

「ふふ、赤ちゃんにも、パパの精液の味、教えてあげないと、ね」
浩之の——パパの優しい手を頬に感じながら、私は、愛しい精子たちが息づく陰嚢に、そつと舌を這わせた。

とりあえず
お話しここまで。

だけど幸せは
まだ これから。

続きは また
ここで こうして
ゆっくりと——。

トロユキ／＼
一々な事され
ちゃんばせやせ半
にしそうなとこ
変態に過ぎや／＼

(ハハ)

ウンコ食でこちんはがう
一番やんしーナセすみ
ぜぐんが見えてあたるボーッ

ふふふつ どうしたの?
まだ2回出しただけじゃないー、
綾香サマのおちんぽはこの程度じゃあ満足しないわヨ♡

約束だからね、浩之がシてくれるって言うから
姉さんに生やしてもらつたコレが萎えるまで、
たっぷりあと5発は出させてもらうから。





ヒザマクラ

我流痴帶
www.wasurena.sakura.ne.jp/~tana00

2004.Autumn



この作品には偏執的かつ過激な
内容が大量に含まれています。